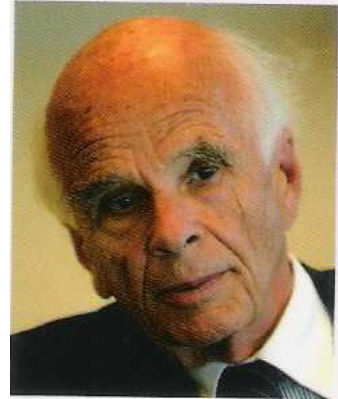


## アーヴィン・ラズロ (Ervin Lazslo)

1932 ハンガリーのブダペストで生まれ、音楽に興味をもちやがてピアノの演奏家として世界中に名を知られるようになりました。しかし彼がピアノ演奏を契機に世界中を旅する中で宇宙の誕生・進化そして運命について考えることになり、種々の学術分野にわたる膨大な文献を勉強し自分独自の進化論いわゆる総括的進化論 (General Evolution Theory=GET) そして大統一論 (Theory of Great Union) を展開しました。今日、ラズロはピアニストのみならず哲学者、システム理論者、未来理論者などとして評価されています。



ラズロは75冊以上の本を著作しその大多数が多くの外国語に翻訳されています。

彼の本の邦訳

1. 進化の総合心理、1996
2. 叡智の海—物質・生命・意識の統合理論、2005
3. カオス・ポイント—持続可能な世界のための選択、2006
4. 生ける宇宙—科学による万物の一貫性の発見、2008
5. CosMos コスモス、2008
6. グローバルブレイン—みらいへの鍵—地球崩壊を止めるためによりよい世界へ向かう世界頭脳のクアンタムシフト、2008

## アーヴィン・ラズロの進化論 ジャムシデイ ジャムシッド 医学博士

初めに：

ラズロが宇宙の三領域（物質・生命・精神）の諸実体を開放した系（システム）として捉えシステム同士の相互関係の中でシステム内部の変化を進化の担い手と見ている。熱力学の第二法則を用い進化の機序を説明する。

ラズロの意見では進化が常に可能性であり、決して運命ではない。予測できないし、起こったとき非可逆的であり、跳躍な性格を有する。進化の非局在性、前一性または一貫性（コヒーレント）が「真空」の場においてのみ可能と考える。

本論：

存在の三つの領域—物質・生命・精神が宇宙を構成していると考ええる。それぞれ領域の進化が関連した学術分野により確認されているが決して三領域の進化が孤立したものではない。図1で示されている如くビッグバーンから始まった物質（クォーク、原子、分子等）の進化に続けて生命（単細胞動、多細胞動物、生態系）そして人間社会の文化の進化が可能になった。

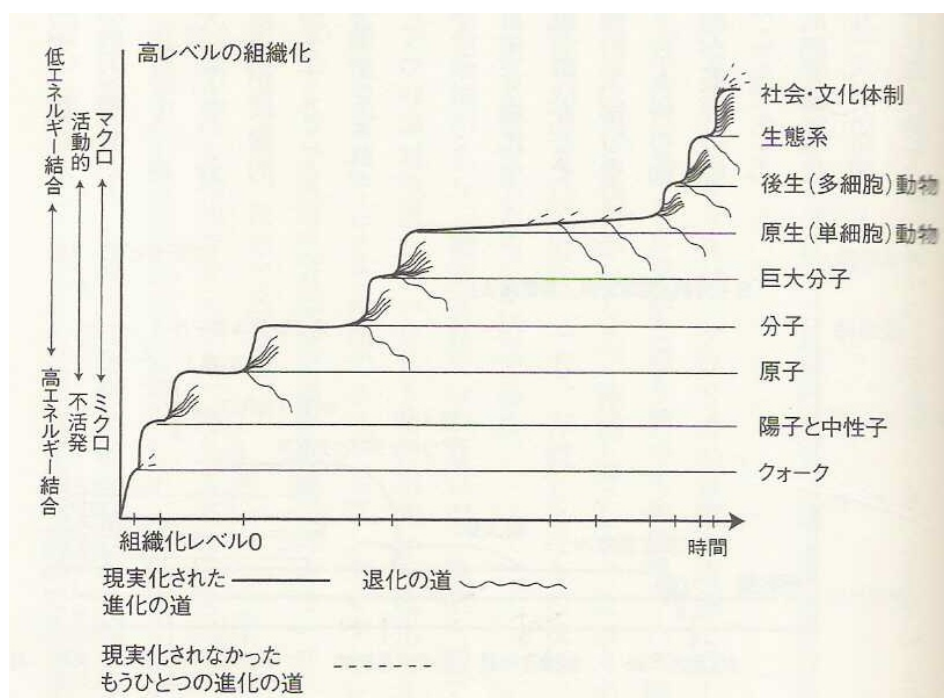


図1 存在の三領域の進化過程

宇宙の進化の過程が決して容易いものではなかったと推測される。自己組織化の可能性を多いに有した系（システム）が進化の道を辿りそうでないものは退化した。強い組織化能力によりより大きな複雑な新しい系が生まれる。系の組織化の運命が外界とのエネルギーのやり取りの能力によって決まると考える。ラズロが熱力学の第二法則を進化のメカニズ

ムの説明に応用した。

現実の世界にある系は、(熱力学第二法則) 三種類の状態のいずれを取りうる。

- A. 平衡状態の「中に」ある。...温度と密度の差異がまったくなくなり、不活性的、  
例：水の中に完全に溶けた氷
- B. 平衡状態に近い、温度と密度の違いが小さい....平衡状態に移行しやすい、  
例：水の中に新しく入れた氷の塊
- C. 非平衡状態（第三状態）、熱的、化学的な平衡状態から大きく外れた状態。  
秩序（order）を保つため常に外界とエネルギーのやりとりを行う。

進化の可能性を示す系が第三状態の非平衡状態の活性的な系であり高い組織化能力により進化を可能にする。

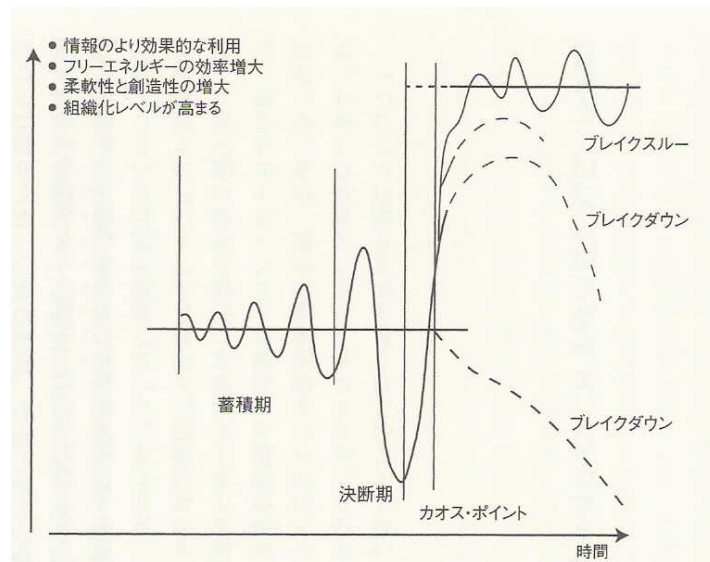


図2 第三状態にある系の内部変化（進化）の四段階

図2で示されているように系の行方が四段階を通る。安定した蓄積期、決断期（不安定を伴う過剰な蓄積）、不安定が増すカオス・ポイントに差し掛かったとき最後に分岐を余儀なくされる。カオス・ポイントに差し掛かった系が組織化の能力により進化（ブレクスルー）し新しいより大きな系を形成するかそれとも退化（ブレイクダウン）して行くか。

### 生命の進化

46億年から36億年前に地球全般で成立していた(化学的、エネルギー的)条件のもとでは生命は宇宙的な偶然によってではなく、必然的に生まれたのだという考え方が科学で承認されている。地球表面の化学組成は、生物学的プロセスを開始することができる、熱力学的に成熟した理想なものだった。

種の形成に関して、ある優勢だった種が環境などのパラメータの変化によって不安定化し、周辺部で出現した様々な突然変異によって代わられたと考えられる。種の進化が跳躍的で

第三状態の系と共通した特徴を示す（図3）。

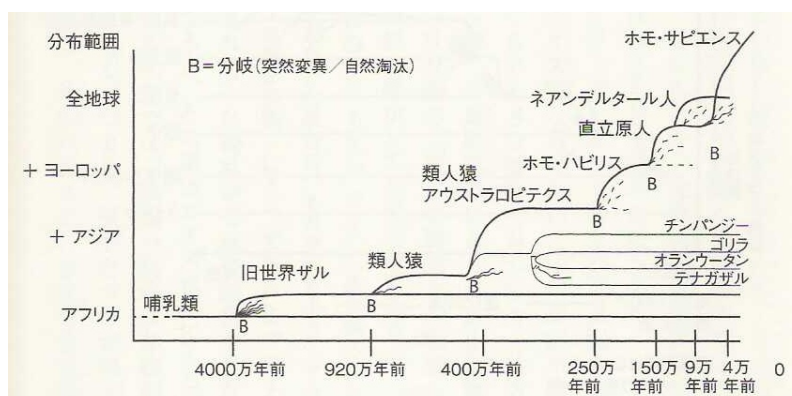


図3 第三状態の系として人間の進化段階

### 社会の進化：

社会は、特定の関係にある人間の集合からなるシステムである。しかし人間が社会を意識的に設計したものではない。社会は人間によって構成されているが、人間行動や性質の和に還元することはできない。社会の運命が個々の成員の運命とは無関係である。

社会システムの減少は生物的な世界よりも上位の組織化水準を占有している。自己組織化も社会の特徴の一つである。そのほかの第三状態にあるシステムと同じく、社会はそれ自体として自己進化するシステムであり、重大な擾乱を生じたあとは従来とは異なる安定状態に落ち着くことができる。自己創出と分岐を通して、社会はその環境の中で自らを維持し、持続可能であれば、時の経過にしたがって、新しい構造と組織化の様態を進化させる。

社会は、収束を通して、より高次の組織化水準へと徐々に進化する（図4）。

社会の進歩の推進力は技術である。技術とは、人間が自然に対して働きかけ、他者と関わりあう力を拡張する手段という意味である（図5）。

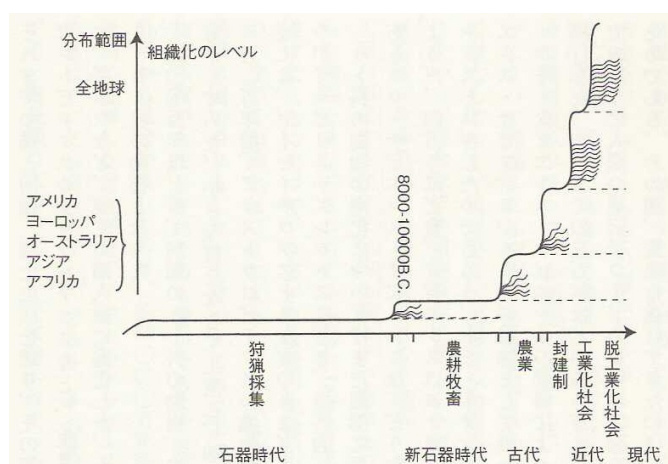


図4 人間歴史における社会形態の進化

社会の情報プール(広い意味での社会の「文化」)が時代遅れでなく現在の状況に適合しており、十分に機能しておれば、生産システムや消費システムも適切に機能し、社会をその環境のなかで維持することができる。

### 精神の進化

精神(知能)を獲得した人間が第三状態にある複雑なシステムであるが 意識は第三状態ではない。精神が、平衡状態にない複雑なシステムの働きであり表れであるならば、人間という種のみに限定されたものとは限らない。脳の進化と平衡して、精神も、未分化な原始的感覚の海から、分化した知覚の座へと進化するはずだ。意識は、ミステリアスで超越的な属性ではなく、感覚で捉えられ、理解された環境の内的な記述を、内的に記述する能力である。

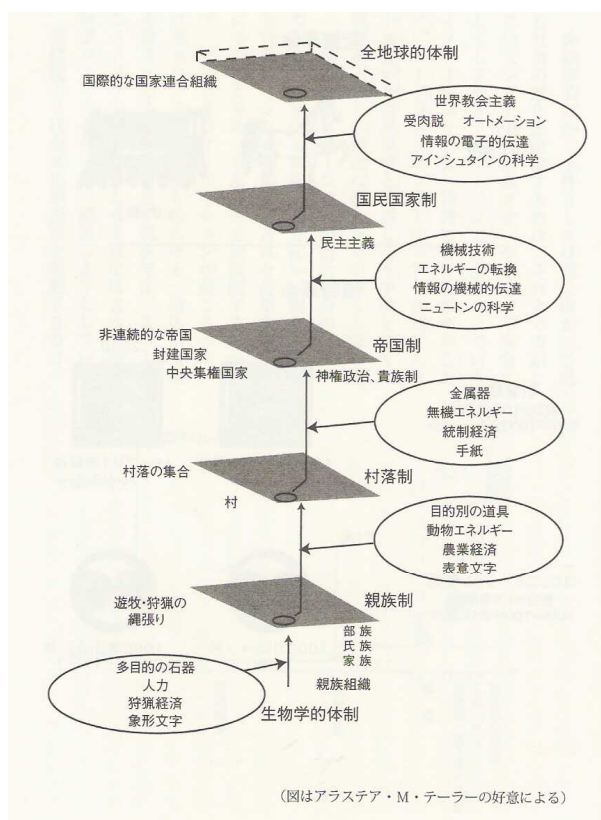


図5 社会形態と技術振興との関係

人間の精神は、よりいっそう技術的に向上した社会を実現する進化を促しながら、生存の領域から開放し、分化の領域を作り出す。精神と文化は、技術や社会と共に進化する。人間が意識を進化させ、文明の跳躍な変化をもたらしたと考えられる。ミュトス(神話)からテオス(宗教)へ、テオスからロゴス(論理性)へと、ロゴスからホロス(全一性)へと文明が進化する転換期に差し掛かっている(図6)。(意識進化の分類にはヴィルバーの分類を用いる。)

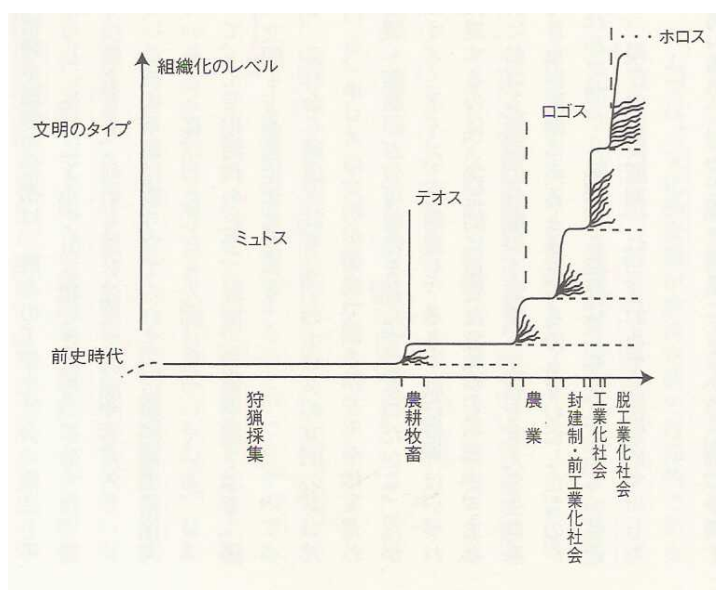


図6 文化の発展と社会形態との関係



宇宙の一貫性（コヒーレンス）：宇宙の存在全て（存在の三領域）が「真空」の場を通じて互いに関係を持ち相互調整、そして調和を保ち、宇宙の安定と秩序を継続させる。この宇宙の母とも言える「真空」の場が宇宙を生んだ存在ではあるかに宇宙を越えたものと考えられる。ラズロがこの「真空」が宇宙の始まりと終わりの根源（叡智の海）であると考えている（図7）。意識のコヒーレンス（超個的心理）の証しとして全有意識（Panpsychism）、遠隔認知（Telepathy）、遠隔身体刺激（Telesomatic）、非局在医学（Non-local medicine）、遠隔ヒーリング（remote healing）、臨死体験（Near Death Experience= NDE）、体外経験（out of body）、遠隔透視、装置を通し、死者との会話（Instrumental Transcommunication=ITC）等が上げられている。

精神も脳も物質も同様、波動を発し、波動が場を形成する。場における同期または調和する波動同士がホログラムを作る。ホログラムが全ての情報を記憶、記録する。ホログラムが大ホログラム、そして大ホログラムが超ホログラム、超ホログラムが超超ホログラム（Akashic-field=叡智の海、純粹意識、真空の場、宇宙の母など。）に合流する。

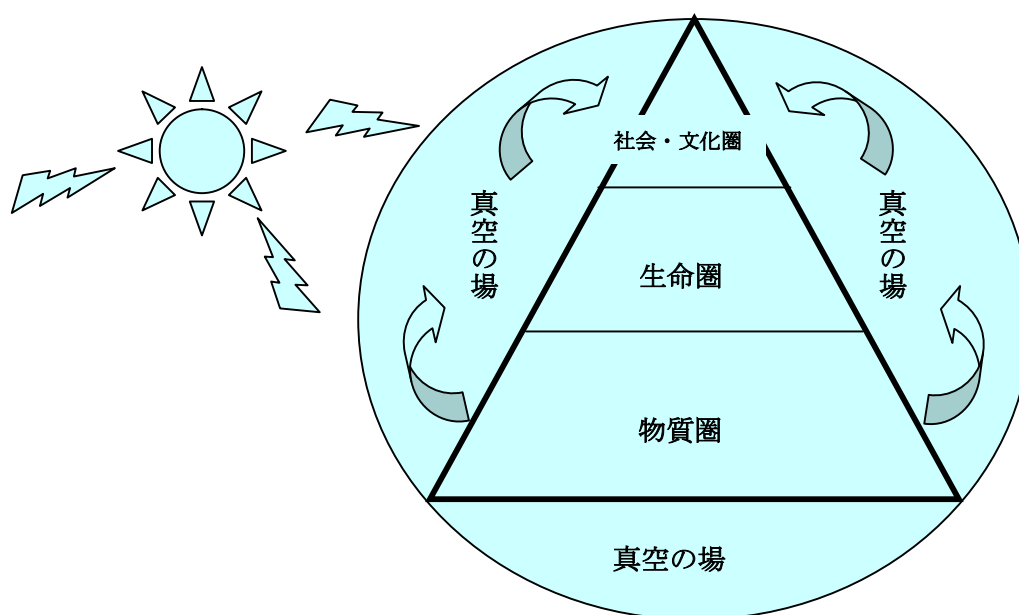


図7 「真空」の場：宇宙の根源でありコヒーレンスの機能により存在三領域全てを関連づけ、進化を可能にする。

（この図はジャムシデイの考案です。）

#### 文献：

1. 進化の総合心理、1996
2. 叡智の海—物質・生命・意識の統合理論、2005
3. カオス・ポイント—持続可能な世界のための選択、2006
4. グローバルブレインみらいへの鍵—地球崩壊を止めるためによりよい世界へ向かう世界頭脳のクアンタムシフト、2008